

佐伯卓俊 『コミュニティバンクとしての信用金庫』

【研究テーマについて】

ペイオフの完全実施に際して、体力の弱い金融機関は市場から軒並み厳しい評価をたたきつけられ、多くの預金者を失い、生き残りのために合併統合を余儀なくされています。信用金庫もその例に漏れず、都市銀行・地方銀行入り乱れての激戦の中で、まさに存亡をかけたたたかいを強いられているわけですが、そのなかで信用金庫はコミュニティバンクとして、地域に密着した経営に徹することで生き残りを図ろうとしています。

筆者の佐伯さんは信用金庫への内定が決まっており、就職内定先である信用金庫のあるべき姿に関心を持ちました。これが卒業論文のテーマとなったわけですが、ゼミで非営利組織を学んできたことと、就職先が非営利の金融機関であったことが、卒業論文の中でうまく結びつき、知識を活かしたのではないかと思われまます。

もともと地域に密着して成長してきた信用金庫が、改めて地域密着型の経営を打ち出さなければならないのには、金融検査マニュアルに象徴されるような金融行政の締め付けが要因としてありました。

設立経緯からすれば地域密着で非営利だが、営業形態は一般の銀行（営利組織）とほぼ同じという、信用金庫の中間的な位置づけがその背景にあると思われまますが、信用金庫の非営利性を打ち出さなければ経営的にも成り立たなくなっているというのは大変興味深いところです。

そうしたことから、筆者は時宜を得た研究テーマを選んだといえます。

【研究方法について】

信用金庫に関する資料を丹念に調べていることを評価したいと思います。

また、日本だけでなくオーストラリアのクレジットユニオンやコミュニティバンクにも着目して、海外の事例からもヒントを得ようとしていることも、この論文の良いところと言えます。もちろん、クレジットユニオンやコミュニティバンクと日本の信用金庫を同列に扱うわけにはいきませんし、安易な比較は慎むべきでしょう。しかし、海外の事例を見ることで気づかされることも多くあります。

テーマの選び方はとても良かったのですが、内容面ではやや表面的な事象を扱っているという印象を受けます。また、オーストラリアの事例（第3章）に関しては、1冊の本に情報源を全て依存しています。

ただ、日本の信用金庫に関して言えば、筆者は就職内定先の信用金庫の関係者などから実態に関する話を既に多く聞いているとのこと。話を聞いても、それを論文として表に出せるかどうかはまた別問題ですから、いたしかたのない面もあることでしょう。就職後もこの問題意識を常に持ち続け、日常の業務の面から、信用金庫がいかに地域に貢献する金融機関となりうるのか、考えを深めていってほしいと願っています。